

## 有朋自遠方来



外国における日本研究は増々盛んになっている。——少くとも、大和文華館を訪れる海外の研究者を見る限り、そのように言えるのです。この欄でも外国の日本美術研究者を沢山紹介して参りましたが、その内容も博物館・美術館関係者、大学関係者、個人の蒐集家・研究者とバラティイーに富んでいます。日本美術の海外における収集は近年増々盛んで、それだけ一層、研究者も多くなっていると言ふことができましょう。それには、日本の優秀な学者が海外にどんどん進出して、日本の学問的水準の高さを示したことが大いに役立っているのであり、他方では、日本の世界における経済的進出とも無関係ではないようです。様々な面で日本の力が認められるようになってきたと言ふのでしょうか。

現代日本が経済力に裏付けられた文化的国家であるかどうかは別にしても、日本の文化は古く、西洋の人々が関心を寄せるに足る魅惑的な有形・無形の文化遺産を蔵し

ていることは確かです。しかし、版画や刀装具、根付けなどの研究から始った海外の日本美術研究も、最近では遥かに進展し、日本の古代彫刻や、近世の絵画といった日本においても主流の研究テーマを掲げて訪れる人のいるのに驚かされます。そして、かなりの専門的観点で日本と外国の研究者が議論を展開させてさえているのです。日本の文化は日本人にしか分からない、と言つていられる時代がいつまで続くでしょうか。彼らの来日は、そのような意味でも、日本の研究者を大いに刺激しているはずで

今日のお客様もその一人。珍しく歌仙絵を研究テーマとするミシガン大学の大学院生マリベス・グレイビルさん。目下、博士論文を準備中とのことで、折りからの歌仙絵展の期間中、熱心に調査を続けていられました。今回は四度目の来日で、二年間滞在し、京大の聴講を受けられるそうです。

(写真はグレイビルさんと館長)

季刊 美のたより No.41

昭和52年11月20日

発行 大和文華館